

マルセル・エメ研究の最近の動向

杉山 毅

1. 小さな死亡記事から

1967年10月16日付、大阪朝日新聞の朝刊は、次のような記事を掲載していた。〔マルセル・エーメ氏¹⁾ (仏小説家・劇作家) 14日パリで死去、65歳。(ロイター) / 1929年「でぶの食卓」でルノード賞を獲得し、小説家の地位を確立。著書としては「壁抜け男」「回り道」「ウラニュース」「青い牝馬」(以上小説)、戯曲としては「クレランバル」「他人の顔」、童話「鬼ごっこ物語」など。日本にも多数翻訳がある。(共同)〕

この短い記事は、もしマルセル・エメという作家に関心がなければ見過ごしてしまうていのものであろう。しかし比較的若い頃からこの作家に親しんできた筆者は、これを読み捨てるに忍びず、切り抜いてノートに保存し、その後も二度・三度読み返しているうちに、じつは多少複雑な思いにかられるようになっていた。というのは、この記事はフランス文学の専門家が書いたものではなく、共同通信社の一記者の手になるものと想定されるのだが、にもかかわらず、そこにはこの作家に対するわが国の理解の程度が如実に示されている、と思われてならなかったからである。少しその点を敷衍しておこう。

まず上記の記事に散見される二・三の問題点を指摘しておきたい。最初に『でぶの食卓』とはいかなる作品を指すのであろうか。筆者ならずともこの点に疑問を抱く向きもあると思われるが、この作品が1929年「ルノード賞を獲得し」とあるところから推して、その原題が La Table-aux-crevés であるとの推察は可能であろう。上記の引用文中ではその邦訳題が『でぶの食卓』となっていたのであるが、別のあるフランス演劇専門家の著作²⁾では『死んだ野郎のテーブル』という訳になっていて、上記の訳だけがおかしいというのではない。これらをフランス語の原題と並べて見ると、この二つの訳に示された、それぞれの訳者の苦心もよく分かるのだが、ここはまずもとの小説を読んでみるべきであって、そうすればこの題名が小説中に登場する土地の名前に由来することが判明するであろうし、それならば『ラ・ターブル・オ・クルベ』と横文字をカナ表記にするにとどめるか、それとも英訳本のように小説の内容に準拠した『窪んだ土地』(The Hollow Field, 1933) とでも訳されていればよかったのである。そうすればいらざる誤解を招くこともなく、筆者がここで試みた無用の詮索を招くこともなかったであろう。

次に、やや細部にこだわるようではあるが、上掲の記事の中で「(以上小説)」と

して挙げられた作品の内、『壁抜け男』は周知のように表題作を含む10編の中編小説集であり、しかもこの作者は他に5編の中編集⁹⁾を公刊している、いわゆるnouvelleの名手としての評価も高いのだから、他の3編の長編小説から一応区別するだけの配慮があってもしかるべきだったのではないか。字数に制限のあるnécrologieでも、それほど無理な注文だとは思えないのだが。

最後に、この記事の末尾に記されている「日本にも多数翻訳がある」というのは、はたして事実に基づく正確な表現と言えるのであろうか。筆者の目の届く範囲内で調べたかぎりでは(従って万全の調査というつもりはなく、むしろ見落としがあればご教示願いたいのであるが)確かに十指にあまる翻訳がある¹⁾。しかし、その中には『壁抜け男』の場合のように、異なる訳者による同じ作品の翻訳が多く、翻訳作品としては小説2編、中編集2編、戯曲3編、童話2編を数えるのみである。この数を「多数」とみるか否かは、多分に主観的な判断に基づくことになるであろう。しかし、長編小説17編、中編小説集6編²⁾、戯曲11編、エッセー2編、童話2編の他、未刊のかんりの数にのぼる中編小説、さらに1959年9月28日サラ・ベルナル劇場で上演されたが不評ゆえに単行本として刊行されなかった戯曲 Patron、³⁾ その他の未刊の短い戯曲、加えて160編以上にも及ぶ新聞・雑誌への寄稿記事(書評、時評など)を書き残した作家の翻訳としては、どのように考えてみても「多数」という言葉は当てはまらないのではないかと。少なくとも筆者はそう思っている。「多数の翻訳」という場合、筆者の脳裏にまず浮かぶのは、「全集」あるいは「著作集」と銘打って刊行されている枚挙にいとまのない著名なフランス作家の名前である。ジェルメーヌ・ブレが『小説の時代』⁴⁾の中で言及した作家たちを例にとれば、「ジッドからカミュまで」彼らの大半は日本において文字通り「多数」の翻訳がなされている作家たちであるのに対して、その中でマルセル・エメはジャン・ジオノーほどではないにせよ、アンリ・ボスコ、レーモン・クノーなどと共に、わが国ではいまだその全貌が十分に紹介されていない作家のひとりに属しているようである。⁵⁾

11. 新しい評価を求める動き

1984年、ボルドス社から刊行された3人の編者による『フランス語で書かれた諸文学辞典』⁶⁾では、従来のいわゆる文学辞典とは少し違ったマルセル・エメ評価が示されている。参考までに、その冒頭部分を次に引用しておこう。

AYME Marcel(1902-1967). Romancier, nouvelliste, dramaturge, journaliste, né à Joigny le 29 mars 1902, mort à Paris le 29 octobre 1967.

Dernier des six enfants d'un maréchal-ferrant, Marcel Aymé perd sa mère très tôt. Son enfance se passe dans la ferme et dans la tuilerie de ses grands-parents maternels à Villers-Robert (Jura). Il doit, pour raison

de santé, interrompre ses études, commencées à Dole. Après son service militaire, qu'il accomplit en Allemagne occupée, il gagne Paris en 1923, où il exerce les métiers les plus divers. Il profite d'une convalescence pour écrire un premier roman (Brûlebois, publié en 1926), puis (...) Mais ce n'est qu'avec la publication de La Jument verte, en 1933, que ses difficultés matérielles seront aplanies. Il pourra entièrement vivre de sa plume jusqu'à sa mort. Sa production est abondante, puisque c'est, au total, deux essais, dix-sept romans, plusieurs dizaines de nouvelles, une dizaine de pièces de théâtre et plus de cent soixante articles que nous a laissés Marcel Aymé. L'ignorance dans laquelle la critique et les manuels de littérature ont tenu depuis trente ans cette oeuvre relève du scandale culturel. (作品名以外の下線部は引用者による。)

上掲文中、引用者が下線を施した部分について多少のコメントをつけておきたい。まずマルセル・エメのいわば肩書として「長編小説家、中編小説家、劇作家」に「ジャーナリスト」という項目が加えられたのは、これが最初である。この辞典にやや遅れて刊行された、従って現在という時点からいえば、最新のラルスの2冊本の『文学辞典』¹⁰⁾でも、『緑の牝馬』発表以後「マリアヌ」とか「グランゴワール」のような「多少とも諷刺的な政治的・文学的な定期刊行物にマルセル・エメの署名が現れる」ようになったと記されている。しかし、それ以上の記述はない。もしそれだけのことであれば、1960年に公刊されたホル・ヴァンドロームの『エメ』¹¹⁾の巻末の「資料 III」の項目に、未刊の中編小説を含む120数編の記事のリストが掲げられていたことを想起すれば足りることで、さほど目新しいこととは言えない。上掲文におけるように、「ジャーナリスト」という肩書を新たに加え、マルセル・エメの文筆上の業績の中に「新聞・雑誌への寄稿家」という側面を明確に指摘したことの間には、大きな隔たりがあると言うべきであろう。

第二の下線部はマルセル・エメの死亡の日付に係わる部分であるが、ここで10月29日とあるのは、単なる誤植の部類に属するもので、冒頭に掲げた「死亡記事」にある10月14日が正しい。「過ちは人の常、許すは神」である以上、自戒の念をこめて、この種の過ちを繰り返さないための努力の必要性を強調する他はないが、マルセル・エメに関する記述に限定しても、内外の文学辞典にはこの種の誤りが散見されるようである。¹²⁾

最後の下線部はいささか大胆だが、適切な指摘を含む発言だと言わねばなるまい。マルセル・エメが書き残したものは、すでに述べたように長編・中編小説、戯曲、エッセー、童話、寄稿文と多岐にわたりその量も膨大であるが、率直なところ、これまであまり正当な評価を受けてこなかった。ジャック・ブレネールの言葉を借りれば、エ

メという作家は「偉大な作家というより面白い作家と見なされて」¹³⁾ きたようである。もっともブレネールはこの文章のすぐあとで「ところが、彼の作品そのものは現代文学の中でももっとも斬新でもっとも強固な、おそらくもっとも永続性のあるものだということを、はっきりと示している」と積極的なエメ評価の姿勢を打ち出しているが、こうしたケースはどちらかといえば例外的である。一般的には、エメは「面白い作家」ではあるが大作家ではない、という評価が定説化しつつあるかに思われていた。そうした趨勢に対して、B. Valette(上掲引用文の筆者)は、「30年このかた、批評や文学の手引書がエメの作品に対処してきたその無知ぶりは、文化的スキャンダルに属する」とまで言い切っているのである。

III. マルセル・エメ評価略史

では実際に批評界がマルセル・エメをどのように扱ってきたか、筆者の知る範囲内でその一端を紹介しておこう。

まず炯眼の批評家として定評のあったクロード・エドモンド・マニー女史がエメをいかに評価しているか、多少の興味をもって筆者は『1918年以後のフランス小説史』(1950)¹⁴⁾ を編いてみたのであるが、同書では第一次大戦直後から1930年に至る小説、つまりシュルレアリスムの小説からマルタン・デュ・ガールの『チボー家の人々』までしか扱われていない。残念ながら当然30年代の作家たちが扱われるはずの、この著書の続巻が刊行されなかったという事情もあって、マルセル・エメに対する言及はどこにも見られない。従って主観的な推測を試みる他はないが、サルトルとの類縁性が強調されるこの著者の場合、「シチュアション II」の『文学とは何か』においてエメへの言及が見られないことから類推しても、彼女がエメの小説に高い評価を与えたであろうとは推論しがたい。

これに対してジェルメーヌ・ブレとマーガレット・ギトンの『小説の時代』(1957)では、ジッドとブルーストを扱った第一章「巨匠たち」に続く第二章「果敢な新しい世界」において、現代史の一端を書き留めようとした作家としてデュアメル、ジュール・ロマン、マルタン・デュ・ガール、アラゴンの名を挙げ、最後にこの系列のエピローグとしてマルセル・エメを登場させている。エメの文学世界の全体を知らない人にとっては破格の扱いと映るかもしれない。そして著者は、ここで挙げた小説家たちの作品は「きわめて密接に過去数十年の歴史と関連しているので、われわれは作品を、虚構による彼らの時代解釈として読み、ある程度までそういう見地から評価しなければならぬ」¹⁵⁾ と述べ、マルセル・エメはその「小説の中では、ものに囚われない、ときとして非情な観察者の役割を引き受け」「ある種の社会的制約を受けた20世紀半ばの人間のもつ偽善、臆病さ、非人間性をきわめて効果的な言葉であらわに示すことができた」¹⁶⁾ と高く評価している。1950年代において、エメに対しこのような評価を示したという事実は注目に値する。さらに言えば、後述することにもなるが、その

先見性には大いに敬意を払うべきものと思われる。

アンドレ・モーロワに『ブルーストからカミュまで』(1963)¹⁷⁾と題された著作がある。これはアメリカの学生を対象とした講演集がまとめられて一冊の本となったものだが、期せずして上記の『小説の時代』とまったく同じ時期を扱ったものである。しかし、そこにはマルセル・エメの名前は一度も挙げられていない。モーロワのような博識と良識の持ち主には、エメの文学のもつ率直さと驚異と諧謔は、不作法で節度がなく誇張されすぎていて真実味に乏しいと思われたのかもしれない。また20世紀文学、とくに現代小説についても造詣の深い優れた批評家アルベレス¹⁸⁾などにも、筆者の見たかぎりでは、マルセル・エメを積極的に取り上げ論評を加えたあとは見当たらない。こうした批評家の中では、すでに一度その名を出したポール・ヴァンドローム¹⁹⁾が数少ない例外であろう。さらにフランス文化使節として来日し、広島大学でも講演したことのあるミシェル・レーモンのような碩学でも、その著書²⁰⁾の中でエメに言及したところは見当たらない。

フランスの20世紀文学全般を扱った通史の類では、そのページ数は多いとは言えないにせよ、一応マルセル・エメに関する記述が見られる。浩瀚な『サンボリスムから現代にいたるフランス文学史』(1962)²¹⁾の著者アンリ・クルアールは、その第2巻第2部「兩大戦間の文学」の第5章「社会の描写」の3項「諷刺家たち」の中で、マルセル・エメを扱っている。彼は「黒眼鏡をかけて社会を眺めた」作家たちの内で、社会正義の立場からの告発という形をとらず、アイロニーを唯一の武器として自らの文学世界を構築した人たち(その中にはサン・テグスが『星の王子さま』を捧げたレオン・ヴェルトも含まれている)に言及したあと、「二人の諷刺の大家」を取り上げる。その一人はマルセル・エメであり、もう一人は「そのエメより偉大な」セリーヌである。エメを扱ったごく僅かの分量(1ページ強)の中で、クルアールは「悪い鷲鳥」「象」を童話の、『マルタン君物語』『壁抜け男』を中編小説の傑作だと賞揚したあと、『緑の牝馬』に触れ、「その笑劇的リアリズム」はテニエと一脈通じ、作者の精神にはカゾットやラプレーとの類縁性があると説いている。次いで『移動撮影』『回り道』『ウラニウス』の三部作を成功作として評価、しかしこの同じ作家が『知的な慰め』というエッセーで左翼人のように見えるのは驚きだと語り、逆にいえば、「だからこそ演劇において大成功を博したのであらうと述べ、その「諷刺は深く、的を射ている。エメは今世紀に紛れ込んだ15世紀の精神」であると結んでいる。

ビエール・アンリ・シモンは、『20世紀フランス文学史』(1967)²²⁾の第3部「1929-1939年」のいわば欄外に相当する「最後の一瞥」と題された僅か4ページばかりの紙幅の中で、エメに少し触れている。この欄外の章は「時代精神の表現としての30年代の新しい作家たちをとらえようとする意図」のために、この第3部で扱えなかった「闇のうちに捨てておかれた」作品の中からいくつかを引き出すことを目的とし、そこに風俗小説の佳作を書いた作家たち(ギ・ド・ブルタレス、マルク・シャドゥル

ヌ、アンリ・トロワイヤなど)の一人として、エメが含まれているにすぎない。つまり、マルセル・エメは30年代を代表する作家ではないというに等しい扱ひである。それゆえその記述も僅か5行に満たず、そこで取り上げられた作品も『緑の牝馬』のみである。この通史では、別の箇所『知的な慰め』に関連した記述があるが、とりたてて論評するほどの内容でもない。筆者の記憶に残ったことといえば、エメの辛辣な筆致が「20世紀のボル＝ルイ・クーリエ」を思わせるという比喩で表現されていたということぐらいであろう。ただ、この18世紀のパンフレティスト・諷刺作家との比較にせよ、上記のカゾット(18世紀の幻想作家)のケースにせよ、マルセル・エメと18世紀作家との類縁性が指摘されるのは、やや興味深いことである。

「1900年の世代」と題する章を設け、それを8項に分けて論じ(1「モンテルラン」、2「ジオノー」、3「ポピュリスムの側で」、4「腹心の友と証人、エマニュエル・ベルルからマルセル・アルマンまで」、5「円環小説」、6「冒険と行動」、7「アラゴンのコミュニストたちとエルザ・トリオレのそれ」、8「探偵小説の側で一シムノンの場合」)その第3項でマルセル・エメを扱っているのは、ピエール・ド・ボワデッフル²³⁾である。第3項「ポピュリスムの側で」の内容をいまま少し詳細に説明するとすれば、1「セリーヌの恨みと情熱」、2「現代のラブレー、マルセル・エメ」3「ポピュリストの二人乗りタンデム自転車、レーモン・クノーとルイ・ギュー」4「ジャック・オーディベルディの花火」となっている。いささか周辺の説明が長すぎた嫌いがあるが、これもマルセル・エメの文学史における(ここではボワデッフルによる)位置づけを知るためには、無駄とばかりは言えないであろう。エメについて、ボワデッフルはまず『ラ・ターブル・オ・クルベ』と『緑の牝馬』に触れ、この作者の中に「デルテーユとラブレーを目指しその途上にある、どぎついが面白い物語作家」の存在を嗅ぎ分け、次いで『移動撮影』以下の三部作では、エメは諷刺作家への傾斜を強めるが、そのためには「ラブレーふうの複雑な文体」とともに「反権威的な独立独歩の精神」が必要だったと推論する。しかし、エメの作品が後世に生き延びるとすれば、それは『壁抜け男』をはじめとする中編小説であろうと述べ、最後に『鬼ごっこ物語』に触れ、この作品の不滅さはシャルル・ペローやラ・フォンテーヌのそれに匹敵すると結論している。

『1940年から現在に至るフランス文学史』²⁴⁾のジャック・ブレネールは、すでに少し触れたように、マルセル・エメを高く評価する数少ない批評家の一人である。彼は20代から文芸ジャーナリズムに関係し、いくつかの雑誌にも協力してきたいわば在野の、出版界出身の博識の批評家であって、いわゆる大学人ではない。そのせいか、彼の書くものには批評の原則がなく、折衷主義への傾斜が強すぎるとの批判²⁵⁾があり、それが妥当と思われる箇所もなくはない。しかし批評の方法への関心ばかりが優先し、結果的にさほど面白くもない論考の多いことを思えば、このブレネールのような批評家の存在は必要であり、かつ貴重であると言わねばなるまい。

上記文学史の15章は「単独行動者たち」(Les francs-tireurs)と題され、4名の作家が扱われている。マルセル・エメ、ジャン・アヌイ、フェリジャン・マルソー、アンドレ・ルッサンである。これらの作家たちを1章に集めた理由として、著者は彼らが等しく「いかなるカテゴリーにも属さず、政治的にも文学的にもいかなる大原則を引き合いに出すこともしない」という点で一致しているからだと述べている。そのため彼らは単なる「楽しませる人」「右翼の作家」ということにされてしまったが、幸いなことに彼らがまさしく「楽しませる人」であるのは事実だとしても、「右翼」という点については、それは「大学人の見栄っばりの批評家たちが考えているようなものとは限らない」と手厳しく、いわゆる「左岸」で持て囃されていた批評家たちが正しい尺度でこれらの作家たちを捉えてこなかったことを非難している。

総論的には、マルセル・エメの「厳密にリアリスト的な小説は、現実の世間やあるがままの人間に対する——悲しみの混じった——強い嫌悪を示して」いて、彼が「作品に導入する幻想は、その悲しみや嫌悪を和らげることを目指している」とブレネールは解している。しかし、『移動撮影』から『ウラニウス』に至る三部作は「人民戦線から解放の時期のフランスでの生活に対する最良の証言」であると、ほぼ同時期に書かれた『壁抜け男』や『パリの葡萄酒』も高く評価し、これらの中編集では、闇市、栄養失調、殺人という三つのテーマが支配的だと指摘している。

エメは「右翼」に属する人なのか、それとも「左翼」に属する人なのか。二・三の文学辞典でもこれを問題にしているが、²⁶⁾ブレネールはエメが「右翼のアナーキスト」と称されていることに異をとねえ、彼は「右翼でもアナーキストでもなく、嘘と不正を憎悪していただけ」だと述べる。さらに「参加の文学」の範疇に入れうるページをこの作家の作品から選ぶことは易しいとし、その1例としてエメ没年の年に刊行された『ひとまたぎ』²⁷⁾に収録された「小さな工場」という作品に触れている。その件の末尾に付されたブレネールの評言が面白いので、それを引用しておこう。「マルセル・エメがこのコントを『リュマニテ』紙のクリスマス号のために書いたというのは疑わしいが、確かなことは、いささかもお涙頂戴式ではなく、これほど生きいきと庶民の感受性を描きあげた数ページを、フランス現代文学の中に見つけることは容易でない、ということである。」

作者が「都会の鼠」から「野の鼠」(いずれもロジェ・ニミエの命名)に戻って活躍するのは、新編の『鬼ごっこ物語』の中だけではあるがと述べながら、ブレネールは「これらのコントはフランス文学の不滅のページ」を構成すると賞賛する。次いで劇作家としてのマルセル・エメの仕事を順次好意的に紹介し、さらに「愛」をテーマとし、手法的には「ディドロの『宿命論者ジャック』を想起させなくもない」最後の小説『見知らぬ男の引き出し』にも(多少批判的な論調も滲ませながら)言及している。そのあと、このエメの項の末尾近くで、1936年に発表された Le Moulin de la Sourdine (『スルディーヌ川の水車』) が1973年に「リーヴル・ド・ポーシュ」の一

冊として再刊されたところ、新しい読者によってこの小説が「現代フランス文学の最良の小説の一つ」として歓迎されたという事実に触れ、この読者の判断を積極的・肯定的に評価している。かって筆者は、この小説の主人公と目されるアントワヌ・リゴア少年と『回回道』に登場するアントワヌ・ミショア少年との比較を試みた小さな論考²⁹⁾を書いたことがあるが、その記憶からもこの小説に対する高い評価に賛成であることを付記しておく。

いずれにせよ、われわれはブレネールがここで取り上げたマルセル・エメの項の冒頭に、次のような小題を付していたことを想起する必要があるように思われるのだ。—〈Marcel Aymé, l'inclassable〉— つまり、単なる「小説家」「劇作家」「ジャーナリスト」「随筆家」という枠に収まりきれない存在、いずれの分野でも甲乙付けがたい仕事をなした人物、「現代の」ラブレ、カゾット、ボル＝ルイ・クーリエ、聖フランチェスコなどという比喩だけでは捉えきれない作家、といった思いがつのり、熟慮の末、ブレネールをして〈l'inclassable〉という同格辞を選ばせたのだ、とわれわれは理解しておきたい。

リセなどで使用されている「文学の手引書」の類については多言を慎もう。著名なカステックス、シュレール共編の『フランス文学研究提要』²⁹⁾でマルセル・エメに割かれた紙幅は、僅か1/3 ページ、20行足らずにすぎない。(しかし、同書では同一のページで言及されているセリーヌもアンドレ・ジャンソンも同程度の扱いであって、エメに対してのみ厳しいというのではない。) ボルダス社のラガルドとミシャルによる『テキストと文学』叢書³⁰⁾では、カステックスの『提要』ほどではないにせよ、無視はできないが単なる「ユーモア作家」あるいはプールヴァール劇に近い「諷刺笑劇の作者」として紹介されているにすぎず、基本的にはマイナーな(?)作家として扱われていることに変わりはない。またアティエ社発行の「作品のプロフィール」叢書³¹⁾に含まれたエメの作品は皆無であるし、アシェット社から出ている『作品とテーマによるフランス文学事典』³²⁾でも、エメは完全に排除されている。——以上が、筆者の目を通して見た、フランスの批評や文学の手引書が示すマルセル・エメ理解の概要であろう。これを「文化的スキヤングル」と呼ぶことが、はたして適切か否かは別としても。

とはいえ、上記のようなエメ評価はあくまでも「批評や文学の手引書」に現れた現象であって、一般的にエメの作品が読まれていないというわけではない。1988年度版の『キド』³³⁾によれば、「フランス文学の主要な登場人物たち」の項に戯曲『クレランパール』の主人公と『ラ・ヴィーヴル』の主人公(蛇の女王とみなされている神話的存在)が取り上げられ、ゴリオ爺さんやラスティニャクなどと同列に扱われているし、ロベール・ラフォン社刊の『作品事典』³⁴⁾では、『ラ・ターブル・オ・クルベ』他の長編小説 7編、『壁抜け男』『パリの葡萄酒』(中編小説 2編)、『クレランパール』『他人の首』(戯曲 2編)、さらに『鬼ごっこ物語』が解説の対象となっている

る。蛇足ながら、以上のことを付け加えておきたい。

IV. 最近の研究動向 — 結語にかえて —

ともあれ、「批評や文学の手引書」におけるエメ評価を巡るこのような状況に、いくつかの変化が見られるようになるのは、1980年代に入ってからのものである。その変化の一つは、「マルセル・エメ友の会」が、1981年12月11日、パリに設立されたことであろう。この会はエメの「人と作品のより良き理解を目的とした」もので、名譽委員会にはマルセル・エメの未亡人をはじめとする近親者の他、アンドレ・ブクレール、フランソワ・ビエドゥ、ベルナル・クラベル、ジャン・デュトゥール、フェリジャン・マルソーなどの作家・戯曲家、クロード・オータン・ララ、ジジ・ジャンメールなどの映画人、ミシェル・デコーダン、ジャック・ロビシュ、フランシス・ブリュネール等の大学人・学者、前述の在野の批評家ジャック・ブレネール、そしてアンリ・フラマリオン、クロード・ガリマルなどの出版人、さらには1977年フラマリオン社刊の6冊本のエメの『小説集』の挿絵を描いたロラン・トポールなどが、その名を連ねている。

もとより、この「友の会」設立の意義はこうした顔触れにあるのではない。設立の翌年、つまり1982年に始められた「カイエ・マルセル・エメ」(第1号)以来、現在まで継続されている研究誌刊行の事業にこそ、その意義と重要性が認められるべきであろう。この事業において中心的な働きを示している人物は、「友の会」会長のミシェル・ルキュールと事務局長のイヴ・アラン・ファーヴルであろうと思われる。いずれもフランスの地方大学で教鞭をとる大学人・研究者であり、この二人の手で「カイエ・マルセル・エメ」誌の編集が行われている。この雑誌は、第1部でエメの未刊の、あるいは掘り出されたテキストを紹介し、第2部で研究論文を載せ、第3部で「マルセル・エメをめぐる」周辺の記事を掲載するという体裁になっている。こうして現在までのところ、研究誌は6号まで刊行され、そこに掲載された論文は28編⁵⁵⁾を数える。中には、僅か数ページの単なる印象を語ったにすぎないと思われるものもなくはないが、これまでには見られなかったテーマを扱った論考もある。ここではその中から、ミシェル・ルキュールの「文芸批評家マルセル・エメ」をとりあげ、その内容の概略を紹介しておこう。

その前に、エメ評価の変化の兆しと思われる、もう一つの事実について触れておきたい。それはガリマル社のプレイアド叢書の一つとして、マルセル・エメの『小説全集』全3巻が計画され、その第1巻が昨年、1989年に刊行されたことである。編者は前述のイヴ・アラン・ファーヴルである。この第1巻には処女作『ブリュルボワ』(1926)から『緑の牝馬』(1933)までの作品が収録されているが、いくつかの注目すべき特色を数えることができる。その一つは、作者自身が再版を禁じていたために、その入手がきわめて困難であった初期小説の一つ Les Jumeaux du Diable (1928)が60

数年ぶりに蘇ったことであろう。編者は巻末に 350 ページに及ぶ解説(注、異文を含む)を付しているが、それを読めば、この作品の評価をめぐるガリマール社、とくにジャン・ポーランとのやりとりのあとが髣髴として興味深い。じつはジャン・ポーランその人が、このアベルとカインの神話にも似た双子の兄弟の物語をあまり評価していなかったらしく、そのことが遠因となってエメ自身もこの作品に強い不満を抱く結果となったようである。しかし編者は、「美しいページ」をもつこの小説が「読者に純粋な楽しみを提供しうる作品であるとの判断から、これを『小説全集』に採録することを決意する。だが、生前のエメが再版を拒否していたというその意思を尊重し、「補遺」という枠組みの中に入れてのだと述べている。³⁶⁾

次に注目すべき点は、エメが1926年から33年にかけて10数種の新聞・雑誌に発表した時評的文章の中から、1932—33年に *Voilà, Marianne, Paris Magazine* の3紙に発表した記事16編と、*Candide, Fantasio, L'Image* に掲載された8編及び未刊の2編の中編小説とが、この第1巻に収められたということである。編者の「解説」によれば、エメが時評的な文章を書いたのは「まずは生活のためであったが、同時にそうすることで、現実の中の面白い事実、風俗的特色を嗅ぎ分けながら、人間を観察することができる³⁷⁾」からであり、また残されていた中編小説については、これらの作品が完成度においてやや難があると判断した作者エメが、それらを単行本の中に加えることを躊躇したために、そのままに放置されたのであろう、と推論している。³⁸⁾ いずれにせよ、こうして今まで読む機会がなかった文章に接することができるようになったという意味では、本書の刊行はエメ研究を推進する上で大きな役割を果たすであろう。

「素顔のフランス、ありのままのフランス人をよりよく知りたいと思っている外国の友人がいれば、躊躇することなく私は、マルセル・エメの作品を読むことを勧めるであろう」とイヴ＝アラン・ファーヴルは、本書の「序」の冒頭に書いている。その理由は「彼以上に巧みに田園や都市の現実を描くことができたり、第3・第4共和制下のフランス社会の忠実なタブローを提供しえた作家はいない」からだと説明し、「彼の長編・中編小説を通して現代フランスの歴史の素描が行われ、また一つの確固とした風俗研究が示されている³⁹⁾」からだと述べている。このような見解を、かりに肯定的に受け止めるとしても、何をもって「素顔のフランス」といい、いかなるタイプの人間を「ありのままのフランス人」と解するかについては、各人それぞれに異論があるであろう。筆者は一応この見解を肯定する立場に立つが、ここで後述することを約したジェルメーヌ・ブレの見解を援用しつつ、ここで言われている「素顔のフランス」の具体的内容の把握に努めてみよう。ブレはマルタン・デュ・ガールを取り上げた際に「ブルジョワ小説のコルネーユ」という副題を付し、「病める良心、それこそ現代の宿命の劇場」(アンドレ・ジュアレス)を引用しながら、「マルタン・デュ・ガールの主要人物は、すべてこのような病患の犠牲者⁴⁰⁾」であると述べてい

た。だとすれば、デュ・ガールの作品に登場する、コルネーユ流のあるべき人間像を追求する誠実な人物たちを、マルセル・エメが描こうとしなかったことは言うまでもないであろう。また、まるで「聖者」のような労働者や коммуニストを賛美的に描いたアラゴンの世界も、マルセル・エメには無縁のものである。ではこの作家の描いた「素顔のフランス」をどのように解すべきであるのか。『移動撮影』以下の三部作を例にその理解の図式を示すとしてしよう。これらの作品は人民戦線、ドイツ軍による占領下、それからの解放、という時代をそれぞれ背景にしているが、この作者の場合、人民戦線を積極的に支援し、ナチス・ドイツ軍に激しく抵抗し、祖国の解放を勝ちとった例に立つのでもなく、またそのような視点から時代と人間を見るというのでもない。まず彼はこの時期のフランスを「政治的権威と親権が崩壊した社会として冷静に把握する。単純化・短絡化しすぎだとの批判を恐れずにいえば、こういう社会がファールヴルのいう「素顔のフランス」なのであろう。そして、その中で「無意味な理想を偽善的に振り回したり、生半可な知的俗物根性を丸だし」にしたり、要するに「現実を直視できない弱さ」⁴¹⁾をもった人物たちが蠢いている。こういう人々がこの時期の「ありのままのフランス人」なのであろう。このように筆者は理解したいと思っている。

ともかく、マルセル・エメの作品のいくつかはフランス現代史のある時期の貴重な証言であるとすれば、前述の、その概略を紹介することを約したミシェル・ルキュールの「文芸批評家マルセル・エメ」⁴²⁾という論考は、きわめて興味深いものを内包している。1932年10月21日から翌1933年2月24日までの間、エメは「グランゴワール」紙の文芸批評欄を担当し、17編の書評的文章を書いた。ルキュールが考察の対象としているのは、これらの文章である。彼はなぜエメがこの文芸欄を執筆するようになったのか、またなぜその欄から下りたのか、などについても推論を試みているが、ここではそれには触れない。論考では17編の文章は1) 時事的主題を扱った作品 2) 小説(歴史もの、短編など)に大別され、それぞれの文章の内容と意義について論及されているが、ここでは紙幅の制限もあるので、1)の二・三の文章のみに限定し話を進めたい。エメが「グランゴワール」紙で最初に取りあげた(1932年10月21日付)書物は、F. Sieburg: Sur un brise-glace soviétique (『ソヴィエト砕氷船にて』)である。浅学の筆者にとって、これは始めてその存在を知らされた書物に属し、もちろん未見である。その内容は、1931年ソヴィエトの北極巡航遊覧船に乗りあわせたヨーロッパのブルジョワ・グループが乗組員と交わした対話から成るものようである。ルキュールによれば、この書評におけるエメは「もっとも聡明なソヴィエトの水夫たちにも批判精神が欠如していること、そしてソヴィエト体制の基盤そのものがもっとも時代遅れのブルジョワ体制に汲み取られてしまっていることを確認して、著者は驚愕している」ことを強調しているらしい。ジッドの『ソヴィエト紀行』(Retour de l'U.R.S.S., 1936)に先立つこと4年という時期に、このような書物が刊行さ

れていたことにも、またそれにいち早く着目し、書評に取り上げたエメの見識にも注目すべきであろう。別の文章に移ろう。1932年11月11日付けの書評欄の見出しは「インドシナに関する一冊の書」となっていて、そこで言及されているのは R. Recouly: Pistes, fleuves et jungles (『滑走路、河そしてジャングル』)である。これも筆者にとっては未見の書であるが、相変わらずルキュールの説明を援用するとすれば、当時のインドシナではフランス本国より以上に経済危機が深刻で、そのためマルクス主義が大いに力を得ていたことにマルセル・エメは危惧の念を抱いていたという。

「この書の著者(R. Recouly)を運ぶ船上では、乗客たちはアジアにおけるヨーロッパ勢力の将来について、かなり悲観的な見通しを語り合っている」というエメの文章は、彼が正しくマルローと同世代の作家であることを示していると言わねばなるまい。この他、ゴビノの『人種不平等論』に関心を示す M. Lamartinieの La Chimie des races(『諸民族の化学』)を取り上げた1933年1月6日付けの書評は、ゴビノの「人種に関する差別的な理論」を自らに有利に利用しようとしていた当時のドイツ情勢(この1年後にヒトラーは政権を握る)を考えれば、まことに時宜に適したものであった。また、モンテルランの Mors et vita (『死と生』)(1932年2月10日付)を扱った書評では「ヴェルダンの死者への哀悼歌」を死の社会的価値を歌ったものとして高く評価し、「ドイツ人学生への挨拶」についても、生の空しさをではなく価値を知らしめるという死の意味を教えるものとして評価する。

いずれにせよ、ルキュールのこの論考から教えられることは、これらの文章を書いた1年後には『緑の牝馬』が発表され、いささか猥雑で下品だが筆力があり、何より面白い小説の書き手としての地位を確立するマルセル・エメが、じつは冷静に自分の同時代を正確に理解しようとして並々ならぬ努力を重ねていたということであろう。こうした新しいマルセル・エメ像は、残念ながら筆者は未だそれに接する機会をもたないが、同じくこのルキュールの学位論文⁴³⁾において、より精密に、より全体的に考察されているものと思われる。また前述のイヴ=アラン・ファーヴルはプレイアド叢書の『小説全集』3巻の編集という仕事の他に、マルセル・エメの戯曲について「異文」との照合を行いつつ、本格的な研究⁴⁴⁾を継続中と見受けられるし、グルノーブル第3大学のクロード・デュフレノワ教授のそれを始めとして、いくつかの学位論文やマルセル・エメに関するモノグラフィが刊行されつつある。⁴⁵⁾

これまでともすれば面白いが大作家ではない、まじめな作家ではない、と評されてきたマルセル・エメの作品が、遅すぎたきらいはあるにせよ昨今のフランスで漸く、さまざまの面からの真摯な研究・考察の対象となり始めてきたのは、まことに慶賀すべきことと言わねばなるまい。この現象が一時的なものでないことを、そしてわが国においても同じような現象が現れることを、筆者は密かに期待している。

(le 20 août 1990)

注

- 1) Marcel AYMÉ のカナ表記については、これまで「エイメ」「エーメ」「エメ」が使用されているが、本稿では「エメ」とする。cf. A. LEROND, Dictionnaire de la prononciation (Larousse, 1980)
- 2) 川島順平『現代のフランス演劇』（カルチャー出版社, 1974, P.187）
- 3) 5) マルセル・エメの中編小説集としては Le Puits aux images(1932), Le Nain(1934), Derrière chez Martin(1938), Le Passe-Muraille(1943), Le Vin de Paris(1947), En Arrière(1950) の 6冊の他に Enjambées(1967), La fille du shérif(1987) の 2冊が刊行されている。しかし, Enjambées に含まれた 7編の作品のうち 6編はすでに上記 6冊の中に収録されていたもので, <La Fabrique>という小編のみが新たに加えられたにすぎない。また La fille du shérif については未入手で, その内容について知るところがないので, ここでは一応中編小説集 6編ということにした。なお, nouvelleを「中編小説」としたのは, 例えば Henri BENAC, Guide des idées littéraires (Hachette, édition revue et augmentée, 1988) など, roman, nouvelle, conte の詳細な説明と区別がなされているからであるが, 実際は nouvelle と conte の区別がそれほど厳守されているとも思えないので, ここでは「短編小説」と同義に解されてもよい。
- 4) 筆者の手にある訳本や利用しえた「フランス文学研究要覧」の類を二・三参照した結果を以下に列挙しておく。

『人生斜断記』(Derrière chez Martin)(鈴木松子訳, 白水社, 1938)

『クレランパール』(原千代海訳, 白水社, 1956)

『緑の牝馬』(葉田達治訳, 鱒書房, 1956)

『おにごっこ物語』(鈴木力衛訳, 岩波<少年文庫>, 1956)

『第二の顔』(La Belle Image)(生田耕作訳, 東京創元社, 1957)

『他人の首, 月の小鳥たち』(宗左近訳, 東京創元社, 1957)

『マルタン君物語』(江口清訳, 筑摩, 世界ユーモア全集 4, 1961)

『壁抜け男』(山崎庸一郎訳, 集英社, 1962)

『壁抜け男』(中村真一郎訳, 早川書房, 1963)

『猫が耳のうしろをなでたら』(岸田今日子・浅田和子訳, 大和書房, 1979)

『壁をぬける男』(手塚伸一訳, 学習研究社, 1979)

『牧場物語 — コント・ルージュ』(飯島耕一訳, 日本ブリタニカ, 1980)

『牧場物語 — コント・ブルー』(飯島耕一訳, 日本ブリタニカ, 1981)

『もう一つのおにごっこ物語』(金川光夫訳, 岩波<少年文庫>, 1981)

なお, Pol VANDROMME, AYMÉ (Gallimard, <La Bibliothèque idéale>, 1960)の巻末の「資料」の「外国で翻訳されたマルセル・エメの作品」の項に, <Le Chemin des Eco-

- liers (Mikasa Shobo)>(cf. p. 299)との記載があったので、三笠書房に訳者名などを問い合わせたところ、そのような翻訳を出版していないとの返事を得た。別の出版社から刊行されたのかもしれない。ご教示いただければ幸いである。
- 6) Société des Amis de Marcel Aymé が刊行している研究誌—Cahier Marcel Aymé—5号(1987)にこの作品が初めて活字化されている。編者は注記の一部に「われわれはマルセル・エメが書いていた通りに復元したけれども、残念ながら数ページの欠落がある」と書いている。(cf. p. 5)
 - 7) Germaine BREE & Margaret GUITON, An Age of Fiction, The French Nobel from Gide to Camus (A Harbinger Book, 1957, 1962)邦訳『小説の時代』(佐藤朔・若林真訳, 紀伊国屋書店, 1958)
 - 8) 前記注2)『現代のフランス演劇』(pp. 187-197)ではマルセル・エメの戯曲全般にわたって適切な解説・分析がなされている。『現代フランス文学作家作品事典』(講談社 1981)にはエメと『緑の牝馬』に関する松原秀一氏の解説(pp. 487-494)がある。しかし、研究論文としては皆無に等しく、筆者が1960年代に試みた4編の小論(文字通り若書きの拙論)があるくらいである。
 - 9) J.-P. de BEAUMARCHAIS, Daniel COUTY, Alain REY, Dictionnaire des Littératures de Langue Française (Bordas, 1984)
 - 10) Dictionnaire historique, thématique et technique des Littératures (sous la direction de Jacques DEMOUGIN, Larousse, 1985)
 - 11) Pol VANDROMME, AYMÉ (Gallimard, 1960, pp. 300-304)
 - 12) 前記注9)10)で指摘したものの以外に 1) LAFFONT-BOMPIANI, Dictionnaire des auteurs (R. Laffont, 1952, 80, 88), 2) Encyclopedia of World Literature in the 20th Century (Unger, 1967, 75, 81), 3) Arthaud社から刊行された『フランス文学』の第16巻の巻末に付された<Dictionnaire des auteurs>などを、またわが国のもものでは、4) 研究社『世界文学辞典』(1954), 5) 白水社『フランス文学辞典』(1975), 6) 新潮社『増補改定新潮世界文学辞典』(1990)などを参照。3)の記述のなかに<En 1926 il publie son premier roman, Brûlebois, pour lequel il obtient le Prix Renaudot.>とあるのは、もし1行見落としたための誤植でないと思えば思い違いの類であろう。避けがたいことだが作品刊行年に関する誤植、作品名の邦訳として如何かと思われるものが4) 5)に多少散見される。
 - 13) LAFFONT-BOMPIANI, Dictionnaire des auteursのMarcel AYMÉの項(執筆者はJacques Brenner)参照。
 - 14) Claude-Edmonde MAGNY, Histoire du roman français depuis 1918 (Eds. du Seuil, 1950). 佐藤 他訳『現代フランス小説史』(白水社, 1965)
 - 15) BREE & GUITON, An Age of Fiction, pp. 59 邦訳 pp. 54
 - 16) *ibid.*, p. 60 邦訳 p. 55
 - 17) André Maurois, De Prout à Camus (Académie Perrin, 1963) 邦訳『現代フランス作家論』(谷長 茂訳, 駿河台出版社, 1970)

- 18) R. M. ALBERES, L'Aventure intellectuelle du XX^e siècle (Albin Michel, nouvelle édition revue et augmentée, 1959), Histoire du roman moderne (Albin Michel, 1962), Littérature horizon 2000 (Albin Michel, 1974)など。
- 19) 1927年 Gilly(ベルギー)生まれのこの批評家は、ブラジヤック, ドゥリュ・ラ・ロシェル, セリーヌなど右翼と目される作家たちを扱った文章を多く書いている。
- 20) Michel RAIMOND, La crise du roman (José Corti, 4^e édition, 1985), Le signe des temps I(SEDES, 1976), Le roman depuis la Révolution (Armand Colin, 1981)など。
- 21) Henri CLOUARD, Histoire de la Littérature française du symbolisme à nos jours I, II (Albin Michel, 1949, 1962, cf. II, pp.334-335)
- 22) P.H. SIMON, Histoire de la littérature française au XX^e siècle t.1, 2(Armand Colin, 1967) 邦訳『現代フランス文学史』(平井啓之訳, 紀伊国屋書店, 1960)
- 23) P.de BOISDEFPRE, Littérature d'aujourd'hui 1, 2 (Coll.10/18) (Abrégé d'une Histoire vivante de la Littérature d'aujourd'hui, Académique Perrin, 1958)
- 24) Jacques BRENNER, Histoire de la Littérature française de 1940 à nos jours, (Fayard, 1978) cf. <Marcel Aymé, l'inclassable> pp.251-258
- 25) BRENNER の上掲書の表紙裏に次のような記述がある。<Il(=ce livre) n'obéit aucun parti pris et on ne manquera pas ici et là de lui reprocher son éclectisme.>
- 26) Bordas社刊『文学辞典』によれば <Se pose la question des opinions politiques de Marcel Aymé. Si ses articles de presse des années 30 témoignent plutôt d'une sensibilité de gauche, (...) la suite de son activité journalistique prit la forme d'une collaboration à des journaux de droite, voire d'extrême droite. Mais Marcel Aymé n'a jamais travaillé pour l'occupant allemand, (...) >とある。Larousse社刊のものには <A la Libération, Marcel Aymé, qui a publié des articles dans Je suis partout, Aujourd'hui et les Nouveaux Temps, reçoit un blâme pour avoir vendu à une firme allemande le scénario du Club des sous-pirants(1941). Mais c'est à lui que Louis Daquin avait demandé les dialogues du film Nous les gosses(1941), qui exaltait l'esprit de résistance.>とあり、マルセル・エメがしばしば誤解の、時としては非難の対象であったらしいことが、しかし対独協力の事実はなく、むしろ当時の左翼の映画監督ルイ・ダカン(社会主義リアリズムの熱烈な信奉者)との交際が強調されているのは興味深いことである。
- 27) Marcel AYMÉ, Enjambées (Gallimard, 1967) <La fabrique>(pp.103-122)
- 28) 拙稿「Marcel Aymé と子供の世界」(Études Françaises 6, 大阪外語大, 1967)
- 29) P.-G. CASTEX & P. SURER, Manuel des Etudes littéraires françaises, (Hachette, 1954, p.1020)
- 30) R. AUDIBERT, H. LEMAITRE et T. VAN der ELST, XX^e siècle <Collection Textes et Littérature> (Bordas, 1962, pp.534-536)
J. BERSANI, M. AUTRAND, J. LECARME, B. BERCIER, Littérature en France depuis

1945 (Bordas, 1970, pp. 336-339)

- 31) Profil d'une oeuvre <Collection dirigée par G. DECOTE> (Hatier)
Jean-Claude BERTON, Histoire de la littérature et des idées en France au XX^e siècle; 50 Romans clés de la littérature française<Profil formation>(Hatier, 1983) など。
- 32) M. BOUTY, Dictionnaire des oeuvres et des thèmes de la littérature française, <Faire le point> (Hachette, 1985)
- 33) QUID, (Robert Laffont, 1988) p. 302
- 34) LAFONT-POMPIANI, Dictionnaire des oeuvres (Robert Laffont, 1954, 58, 62, 68)
- 35) <Cahier Marcel Aymé> 1-6号所載の論文は下記の通り。左端の数字は、雑誌の号数と配列順を示す。
- 1.1. André BEUCLER, Les silences de Marcel Aymé
 - 1.2. Yves-Alain FAVRE, Le genre satirique d'Aymé: La tête des autres
 - 1.3. Michel LECUREUR, Marcel Aymé critique littéraire
 - 1.4. Philippe NATTER, Le ton du parler paysan
 - 1.5. Francis PRUNER, Marcel Aymé et le Jura
 - 1.6. Claude DUFRESNOY, Marcel Aymé: peintre du malaise et du mal de vivre
 - 1.7. Henri BORDILLON, La Vouivre, tragédie paysanne
 - 1.8. Jacques VIER, En relisant le Confort intellectuel: M. Lepage et Baude
 - 2.1. Pierre GRIPARI, Le fantastique chez Marcel Aymé laire
 - 2.2. P.-R. LECLERCQ, Le bifteque fantastique
 - 2.3. P. VANDROMME, L'organisation du quotidien par l'insolite
 - 2.4. M. LECUREUR, Fantastique et réalisme
 - 2.5. Y.-A. FAVRE, Merveilleux et poésie dans les Oiseaux de lune
 - 2.6. Marie BARTOSOVA, "La Bonne Peinture": faiblesse du miracle face aux puissances établies
 - 2.7. Cl. DUFRESNOY, L'Extraordinaire et le merveilleux
 - 2.8. René GARGUILLO, Le renouvellement du merveilleux chrétien: enfer et paradis dans l'oeuvre de Marcel Aymé
 - 3.1. Philippe DUFRESNOY, La Manipulation temporelle dans l'oeuvre de Marcel Aymé: le fantastique enrichi par un thème de SF
 - 3.2. Graham LORD, The short stories of Marcel Aymé (dont la première partie traduite en français par Michel Lericolais)
 - 3.3. Elena REAL, Gustalin, ou les espaces du rêve
 - 4.1. M. LECUREUR, A propos du "Cortège"
 - 4.2. Ph. DUFRESNOY, Sur un inédit de théâtre de Marcel Aymé: Le commissaire
 - 4.3. Mme Henri Crémieux, Souvenirs de Henri Crémieux
 - 4.4. Y.-A. FAVRE, Marcel Aymé aux sources comiques; Patron

- 4.5. Gérard-Denis FARCY, Introduction à la dramaturgie de Marcel Aymé
- 6.1. José Mayorales GARCIA, Lecture psychanalytique d'un Conte du chat perché; Le Problème
- 6.2. Annick SALINESI-PENOT, Le personnage de Museau dans Gustalin
- 6.3. Ph. DUFRESNOY, Notes sur le thème américain dans le théâtre de M. Aymé
- 6.4. Francis LAFORGE, Romans de la terre et romans de la ville chez M. Aymé
- 36) Marcel AYMÉ, Oeuvres romanesques complètes 1 (Gallimard, 1989) pp.1566-1569
- 37) *ibid.*, p.1593
- 38) *ibid.*, pp.1559-1562
- 39) *ibid.*, <Préface> pp. IX-XXXIV
- 40) BREE & GUITON, An Age of Fiction, p.76 邦訳 p.71
- 41) *ibid.*, pp.93-94 邦訳 p.88
- 42) Michel LECUREUR, Marcel Aymé critique littéraire <Cahier Marcel Aymé> N° 1, pp.55-64
- 43) Michel LECUREUR, La Société française dans l'oeuvre de Marcel Aymé(3° cycle, Nante, 1978), Marcel Aymé et la presse écrite (Thèse d'Etat, Pau, 1988)
- 44) 前記注35)に記載された論文中 1.2) 2.5) 4.4)などを参照。
- 45) Claude DUFRESNOY, Ecriture et dérision: le comique dans l'oeuvre littéraire de Marcel Aymé (Thèse d'Etat, Grenoble III, 1978)
- JEAN-Claude VENIAL, Créatures, Créateurs et Création dans l'oeuvre de Marcel Aymé (Thèse d'Etat, Lille, 1988)
- (Monographies sur Marcel Aymé)
- Georges ROBERT, Marcel Aymé cet inconnu(Eds. de la Défense de l'Esprit,1955)
- Jean CATHÉLIN, Marcel Aymé ou le paysan de Paris(Debresse,1958)
- Georges ROBERT & André LOIRET, Marcel Aymé insolite(Eds. de la Revue indépendante, 1958)
- Pol VANDROMME, Marcel Aymé (Gallimard, 1960)
- Hélène SCRIBINE, Les Faux-Dieux (Mercure de France, 1963)
- Dorothy BRODIN, The comic world of Marcel Aymé (Debresse, 1964)
- Jean-Louis DUMONT, Marcel Aymé et le merveilleux (Debresse, 1967)
- Michel LECUREUR, La comédie humaine de Marcel Aymé (Eds. de la Manufacture, Lyon, 1985) La biographie de Marcel Aymé (Eds. de la Manufacture, 1989)
- Jean-Claude VENIAL, L'Oeuvre de Marcel Aymé, de la quête du père au triomphe de l'écrivain (Aux amateurs de livres, 1990)
- 以上は <Cahier Marcel Aymé> 所載の Bibliographieその他を参照。